

高松塚古墳及びキトラ古墳の保存活用について

○発掘調査の整理および活用：

1) 古墳現地でのVRコンテンツの開発と活用

高松塚古墳に関しては、現地でVRコンテンツを格納したタブレットを使用して古墳の本質的価値を伝えるイベントを実施（5、10、1月の計3回6日）。高松塚・キトラ古墳ともスマホ版コンテンツのためのデータ整理を実施。



図1 高松塚古墳石室VRコンテンツと現地解説風景

2) 飛鳥の関連古墳に関するGISデジタルデータの記録と整理

飛鳥の関連古墳に対するデジタル計測を遂行。取得した成果を飛鳥・藤原地域のGISデータに集積し、コンテンツ化を目指す。奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵・鬼の俎（東槲）、益田岩船の三次元計測を実施



図2 橿原市益田岩船遠景

3) 各報告書の編集・刊行

- ・飛鳥資料館所蔵高松塚古墳昭和47年出土品再整理報告書
- ・キトラ古墳石室内考古学調査（壁画取り外し後）報告書
- ・高松塚古墳石室解体・仮整備事業報告書（編集）

4) 海外関連資料調査（中国）

・12月に陝西省文物考古研究院（考古博物館）を訪問し、中国壁画保存の現状を視察する予定であったが、昨今の日中関係をうけて中止となった。3月に韓国の壁画古墳関連遺跡・展示施設等を視察する予定。

○四神の館における国宝キトラ古墳壁画の活用：2025年度の公開

第35回	南壁「朱雀」	5/17～6/15
第36回	天井「天文図」	7/26～8/24
第37回	北壁「玄武」	10/4～11/2
第38回	西壁「白虎」・東壁「青龍」	1/17～2/15

※第36回天文図公開にあわせてプラネタリウムを放映

※第35回、第37回、第38回にあわせて「キトラ古墳壁画絵師なりきり体験イベント」（漆喰風ボードにベンガラを塗った念紙で下描きを転写し、日本画の顔料で着色）を開催（3日間 各午前・午後2回 計6回）。



図3 「キトラ古墳壁画絵師なりきり体験」の様子

○キトラ古墳壁画青龍の赤外線撮影結果の検討

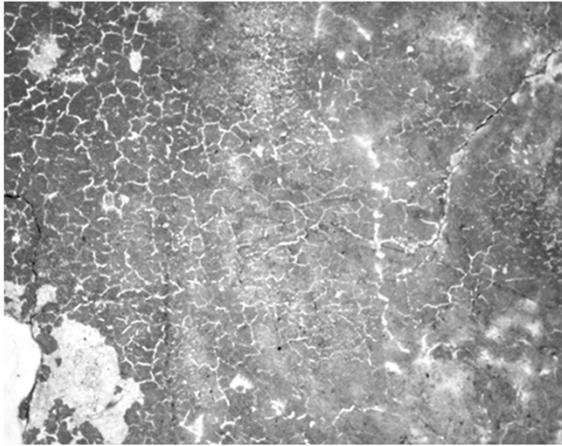
泥に覆われて不鮮明な青龍の全体像を把握するため、令和6年度に波長1550nmの赤外線を用いて撮影した結果、泥の下の描画線を視認するうえでの有効性を確認し、試験的に青龍全身像を合成作成した（昨年度の本検討会で報告した）。しかし泥の層が薄い箇所については透過しすぎる部分の存在も確認した。

そこで今年度は、再度、長波長による赤外線撮影を実施した。昨年度と同じ機材を使用し、970, 1050, 1200, 1300, 1450, 1550nmの各波長域による全体分割撮影を行った。現在、画像接合作業を実施中であるが、泥の厚みに応じて適切な波長の画像を選択した上で、画像合成すれば、この機材構成で最も解像性の高い画像作成が可能という見通しを得たところである。

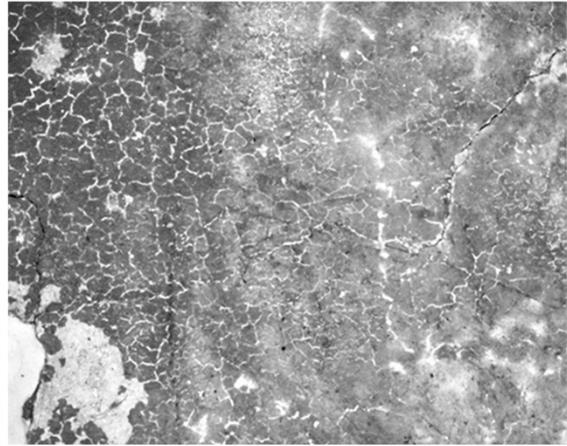
今後、必要に応じて、近接した細部撮影、1650nm（光源製作中）での撮影を実施し、合成画像を作成する。それをもとに図像を検討し、トレース図を作成する予定である。また、十二支（辰・巳・申）についても表打ちの除去が完了した後に撮影を行いたい。



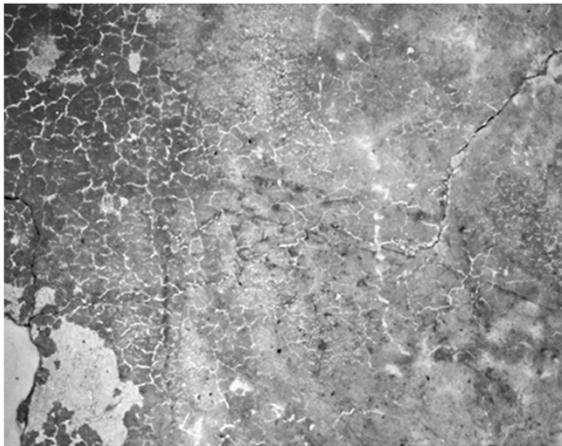
図4 赤外線撮影の様子



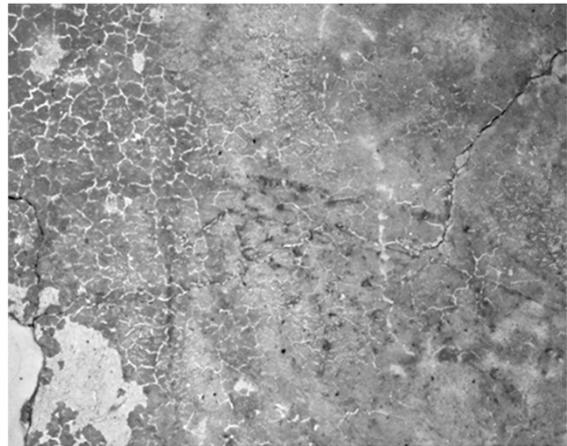
970nm



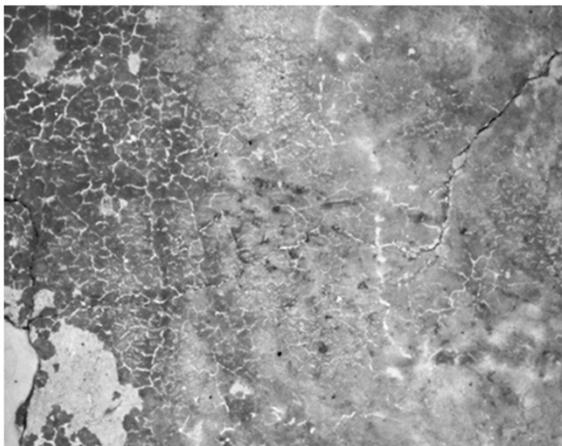
1050nm



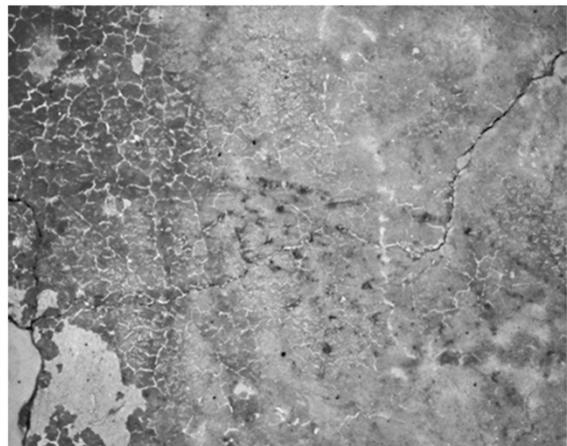
1200nm



1300nm



1450nm



1550nm

図5 各波長の画像例（ここでは泥が厚く長い波長の視認性が高い）